

【Ⅱ】 春待ちかねて

春はあらゆる生き物にとって再生の季節である。三月の雨の中であらゆる植物は息を吹き返し、動物もまた冬眠から目覚める。ギリシャ神話によれば『ゼウス』と農耕の女神『デメテル』の子『ペルセフォネ』(Persephone)が、夫『ハデス』(Hades)としばし別れて、冥界から地上へ帰る季節でもある。万物が蘇り、大地からさまざまな植物を生み出すこの季節を、『cruellest month』(最も残酷な月="The Waste Land")と表現したイギリスの詩人は、T.S. エリオットだったろうか、ワーズワースだったろうか、それとも…。それが誰であったにせよ、この季節の特徴を実に巧みに表現しているようにも思える。寒い冬から解放されて、期待と喜びに心ときめくとき、人々はまた一年を過ごしたことに対する感謝の念と、また次の一年を重ねようという意欲がみなぎる。『春の七草』はこうした人々の思いが不老長寿への思いと重なって、生まれたものなのだろう。旧正月七日の朝、前の晩に神棚にまな板を据え、用意しておいた七草を包丁の背や、すりこぎ、火鉢、杓子などでたたき、粥に入れて食べる。これが古くから伝わる七草粥の伝統である。もとはといえば中国から伝わった習慣ではあるものの、平安時代から室町時代になると、次第に日本独自のものとして確立され、江戸時代には正月七日は五節供の一つにもなり、七草粥は大事な節目の行事となった。しかしこの行事が広がって行くにつれて、七草のすべてが揃わない地方では、七草のうち、いくつかの植物で代表させるようになってくる。またその一方ではタビラゴやオオバコなど、代替の植物が登場して、七草は多様性を増幅させながら、今日に伝わっているのだろう。現在の七草は鎌倉時代に記された『可海抄』(カカイショウ)に見える

芹 はずな 御行 はくべら 仏の座 はずな はずしろ これぞ七草
の七種類を春の七草としている。秋の七草が鑑賞用の花を揃えているのに対して、春の七草は滋養強壯の薬草類が多く、当時の人間にとって冬を越えることが、どれだけ辛いものであったかを知ると同時に、七草に対する期待と春に対する喜びが、いかにばかりのものであったかを知ることができるのである。

※休眠打破と春化(シュカ)現象=植物は季節の移り変りを、自然環境の変化(04-01-00 参照)によって知り、発芽や開花の準備を始める。温度が一定期間5℃以下になると、冬が来たことを認識する。一方温度が5℃以上になると、桜など夏に出来た花芽が休眠していたものは、休眠から目覚めて、開花の準備を始める。これを『休眠打破』と呼んでいる。一方、小麦や大根のように、秋に発芽して冬を越す植物は、温度が下がることによって冬を認知し、温度が上がってくると春を感じて花芽を形成し開花する。これを『春化現象』とか『春化』と呼んで経済栽培に利用している。



甲府盆地の菜の花、後方に見える山は南アルプスと甲斐駒ヶ岳(山梨県北杜市)。

この項に記されている植物のリスト

【Ⅱ】春待ちかねて	08-02-00-1
1) ヨモギ=蓬	08-02-01-1
2) ハコベ=繁縷	08-02-02-1
3) ホトケノザとタビラコとオオバコ=仏の座と田平子と大葉子	08-02-03-1
4) ナズナ=薺	08-02-04-1
5) ゴギョウ=五行=御形(母子草)	08-02-05-1
6) セリ=芹	08-02-06-1
7) スズナ=菘/鈴菜	08-02-07-1
8) スズシロ=蘿蔔/清白	08-02-08-1
9) ナノハナ=菜の花	08-02-09-1
10) フキ=蕨	08-02-10-1
11) ウドとタラノキ=独活と櫨木	08-02-11-1

目次に戻る
